國學院大學学術情報リポジトリ

編集後記

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 國學院大學研究開発推進センター メールアドレス: 所属:
URL	https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/2274

編集後記

本『紀要』第二号は、前号を上回る計十三本の論考を掲載することが出来た。

本年度四月の國學院大學研究開発推進機構の発足にともない、本『紀要』が、今後、より広く、機構に所属する若手研究者達の日々の研鑽による成果を発信する場となることを願っている。

巻頭、阪本センター長の論文は平成十九年九月二十九日に開催された第三十三回「日本文化を知る講座」における講演の内容をまとめたもの。本学の学問の先人達の偉業を振り返りつつ、蓄積された「学術資産」を、現在、そして未来へと、いかに活かすべきかとの提言がなされている。

新井論文は21世紀ＣＯＥプログラムにおける調査によって収集した資料をもとに、近世初頭の日御碕神社の別当であった恵光院順式の活動を通して、寛永時の同社の大造営の実態について考察を加えている。

太田論文は、近年注目が高まっている日本の伝統文化について、年中行事の一般社会への浸透を史料にそって裏付けようとしたものであり、現在の年中行事が確立したとされる室町時代に焦点を当て、この時代の最も有名な日記である『看聞日記』記載の史料を中心に分析を加えている。

大東論文は、近世前期における真言神道の地方的展開を理解するために、日御碕社において伝授された素盞烏流神道について考察を加えたもので、特にその由来について、出雲大社の影響のもとに形成されたのではないかとの論を提示している。

戸浪論文は、島地黙雷の神道論の一つである「神＝祖先」論の形成過程について論じたもの。黙雷において「神＝祖先」論が、明確な思想として見られるのは、明治七年六月末以降であることを指摘した。

中野論文は、鈴木重胤の『祝詞講義』が、かつて本学出版部より刊行された『国文註釈全書』に取り入れられた意義について、重胤による祝詞研究が明治期の研究者達へいかなる影響を与えたかという問題を通して考察を加えている。

中村論文は、初期黒住教と幕末国学者、特に大国隆正とを取り上げ、隆正の思想と同教の教義の近似性を指摘し、また教団関係者との人物交流にも焦点をあてている。加えて明治期にあって隆正の高弟である片岡正占が果たした教団内部での役割についても考察している。

中山論文は千葉県・栃木県の各護国神社が行う戦没者慰霊巡拝の実態調査に基づき、主に主催する神社側や参加遺族間に観察される霊魂観念の一端を紹介したものである。海外における慰霊巡拝を題材とした論考は珍しいものといえよう。

藤田論文は皇典講究所・國學院と伝統文化研究・教育との関わりについて、モノとしての出版物を手がかりとしつつ、特に皇典講究所・國學院における社会教育、普通教育に対する眼差しに注目しながら概観したもの。

星野論文は明治期以降に著された祝詞作文に関する著作のなかに、近代的な祈願祭祀が見られることについて、その祈願内容には、本来の神社祭祀の意義を主張した国学者や神道家の敬神思想が密接に関わっていることを指摘している。

宮本論文は、薩摩国学の形成を辿り、高崎正風が山田清安・八田知紀の学統に連なることを確認し、さらに、公卿・島津久光・精忠派の面々との交流など幕末薩摩・京都で築いた学問と人脈が高崎の明治における活躍に繋がったことを論じている。

森論文は幕末維新期の相模国江の島の神仏分離について、近世の惣別当・岩本院の史料、とくに慶應四年の由緒書などを検討し、明治新政府の神仏分離政策と、それに対応する神職（旧別当）や島民（旧御師）の動きの社会的背景を考察する。

菅論文は特に総力戦期に注目しつつ、従来「国家神道」の語で一括されて来た諸現象の概念的分節化を試みる。その上で、近代国民国家形成諸例の一現象として、神社国家管理及び「神道」の位相をとらえ直そうとする視座を提示している。

（新井）